

「55年ぶりの万博に思う」



♪こんにちは～こんにちは～世界の国から♪と口ずさみ、大阪が大変盛り上がった1970年の大阪万国博覧会から55年を経た今年「大阪・関西万博」が開催されています。開催前にはキャラクターのミャクミャクも含め賛否両論あった

大阪・関西万博ですが、現在ミャクミャクは大変な人気で、万博を訪れた人からは「もう一度行きたい」「パスを買った。」と伺いますので、私も開催中に是非訪れたいと思っています。



55年前に大阪万博が開催された時、小学生だった私は大混雑の会場でもらった「迷子ワッペン」に描かれた★マークが角度を変えると動くことが不思議で何回も向きを変えて動かした記憶があります。今思うとホログラムシールなのですが、その当時は驚きと不思議でワッペンに近未来を感じそして何より「初めて外国の人を見た。」ことが衝撃的な出来事でした。あの頃街で海外の人を見かけることはなく、当時の写真にはブロンドの髪、青い眼をした笑顔の女性の横でカチコチに緊張した表情の私が写っています。

あれから55年、1ドル360円が148円となり日本人にとって海外へ行くことは身近になりました。又、色々な国から日本を訪れる外国人観光客が街に溢れ、海外の人にも当たり前のように出会える時代になりました。

仕事で日本に暮らす外国人も増え大阪市では令和6年12月には160の国や地域を出身とする人が暮らす街となり、その数は年々増加し全市民の6.8%となっており政令指定都市では一番多い比率だそうです。外国人住民数の多い、生野区・西成区・浪速区などの比ではありませんが旭区も年々住民数は増え両国保育所にも日本以外にルーツを持つ児童の入所が増えており、このことは改めて保育を考え、見直す機会となっています。

保護者とのコミュニケーションでは、ことばが通じず保護者の思いが理解できないもどかしさを感じ、翻訳機を使いながらのやりとりでは生じるタイムラグや微妙な変換違いに歯がゆい思いをしながら職員共々日々悩み奮闘する毎日です。

そんな中、児童の母語を歌詞に入れると誰よりも張り切って歌う児童の姿や給食に母国メニューを取り上げることを喜んで下さる保護者の言葉に、自国の言葉や文化を尊重することの大切さを感じています。

又、こどもたちはことばが通じずとも楽しそうに笑い合い、いつの間にか一緒に遊び、日に日に距離を縮めていく姿に気付かされることが多くあります。

一人ひとりの子どもが異なることをお互い受け入れ、認め合い共に過ごすこと、このことは「外国にルーツを持つ児童を対象とした保育」を考えるだけでなく、一人ひとりのこどもや家庭を大切に保育の本質、保育そのものだと改めて感じています。

戦後80年となる今も世界中では紛争が激化し多くの「いのち」が失われています。未来を生きる子どもたちが幼少期のうちから色々な国の人とつながり、それぞれの文化や考えを知り大切にすることを学ぶことで、「すべての人の命を大切にする」争いのない平和な世界が築かれていくことを願っています。

両国保育所施設長 正田智美



ホイク・ド・ターケ・マルケ  
～ニッポンのまんなかで“こどもまんなか”を語る～



表題にあるフランス語のような横文字。これは、岐阜言葉にユーモアを加えて考えられた今大会のテーマで、『ホイク（保育）ドターケ（バカ）マルケ（たくさん人が集まっている様子）』という意味です。日本の真ん中にある岐阜県で、全国から保育関係者が集い、保育について語り合いました。

私が参加した分科会のテーマは、『ニッポンのまんなかで食育を語ろう』です。食育とは何かを考えたときに、食に関する知識を教えること、教わることを思い浮かべる人が多いのではないかと思います。保育所における食育では、栽培活動やイベント型のクッキング保育であったり、もちつき会などの行事であったり、媒体を使って食に関する話をするのであったり、職員が企画するものが食育として捉えられていることが多いです。もちろん、これらも大切な食育で、子どもたちから“もっと！”という気持ちを引き出すことができるので効果的です。一方で、子どもまんなかを考えたときに、子どもたちから湧き出る“思い”を十分汲み取れているかがポイントになります。毎日の給食・おやつこそ生きた食育の媒体となり、子どもたちから「おいしかった！」「また食べたい！」の言葉があれば、「どんなところがおいしかった？甘いところ？」というような言葉がけであったり、「なぜ、野菜を食べないとダメなの？」に対して「みんなのカラダをバイ菌から守ってくれたり、お腹の中をキレイにしてくれるよ。」というやりとりを重ねることが、子どもたちの食への興味・関心を高めることにつながります。保育では当たり前のような何気ないやりとりだと思いますが、調理側がこれを行うには、まずは子どもたちとのコミュニケーションが必要です。作り手が見えない、誰だかわからないでは実現しません。安心・安全な給食提供がゴールではなく、その先の子どもの反応、思いを知り、次に活かすことが大切です。日頃から保育室に足を運び、子どもたちとやりとりを重ねることこそが、生きた食育になるのだと思いました。

開催地の岐阜県飛騨地方には、「さるぼぼ」という郷土玩具があります。この「さるぼぼ」には顔がありません。“楽しい時は一緒に喜び、悲しい時は寄り添ってくれる”、そんな相手として子どもや孫に持たせたことから、あえて顔がないとされています。子どもたちの思いに寄り添うこと、伝統的なこの玩具にこれからの“子どもまんなかの食育”を重ねました。

全国から集まったホイク・ド・ターケのみなさんの保育・食育に対する思い、そしてそれらに携わるようになったそれぞれのストーリーを聞き、意見交換し、深め合えたことは、私自身、管理栄養士として数ある施設の中から保育所で働くことのやりがいや楽しさを見つめ直す良い機会となりました。未来ある子どもたちに食の楽しさを伝えていきたいと思えます。



両国保育所 職員